令和３年度第２回広島市地域包括支援センター運営協議会会議要旨

１　開催日時　令和４年３月４日（金）１７時３０分～１９時００分

２　開催方法　オンライン形式

３　出席委員　１５名
永野正雄会長、落久保裕之副会長、浦宗禎子委員、岡崎ジョージ委員、
河野博子委員、小松孔二郎委員、坂井晶子委員、高橋博委員、永井眞由美委員、
中谷久恵委員、原本明美委員、藤田友昭委員、古本世志美委員、松尾信幸委員、
満田一博委員

４　事 務 局　７名
沖村高齢福祉部長、髙村地域包括ケア推進課長、澄川高齢福祉課長ほか
地域包括ケア推進課職員５名

５　議　　題
⑴　令和３年度における地域包括支援センターの運営状況について
⑵　令和３年度における地域包括支援センター等の評価基準に係る運用について
⑶　令和４年度における地域包括支援センターの運営方針について
⑷　地域包括支援センターの運営基準・評価基準等の改正について
⑸　地域包括ケアに関する意見交換について

６　公開状況　**公開**

７　傍 聴 人　０名

８　会議要旨　次のとおり

永野会長
令和３年度第２回広島市地域包括支援センター運営協議会を開会する。
（事務局から、資料１の説明）

永野会長
事務局から次の資料の説明をお願いする。
（事務局から、資料２から資料６までの説明）

永野会長
次の議題に移る。
（事務局から、資料７の説明）

沖村高齢福祉部長
ただ今の事務局からの説明の付け足しの話のようになるが、このテーマというものは、特に今回コロナ禍において、特に重要なテーマだと考えている。これだけコロナが蔓延する中で、本市としても介護難民が発生してないかと気をもんでいるところであって、地域包括支援センター、居宅介護支援事業所などに対して、

そのような事態が生じていないかどうか先日確認したところである。通所介護事業所で一時的にサービスをクローズしたようなところはあったが、最後の砦となる訪問介護事業所では、一部新規の利用受入れを断ったというようなところはあったようであるが、それほど大きな影響は出ていないということで、安心したところである。このような状況の中で、フルサービスでの介護のサービスというのがなかなか困難なところではある。ケアマネジャーあるいは地域包括支援センターといったところがサービス調整をして、何とか介護サービス体制を維持できたということで、これについて感謝申し上げる。ただこのように、要介護・要支援認定を受けている方については、ケアマネジャーあるいは地域包括支援センターなど本当に気にかけているということでいいが、そうでない方について、コロナ禍で心身の状態が悪化するなどがあったにもかかわらず、誰にもケアされていないといった高齢者もいるのではないかと危惧している。実は、これは昨年の第１回、第２回のワクチン接種のときに感じたことであるが、閉じこもってしまって、接種機会もないような方もいたのではないかと危惧している。当時ワクチン接種のことについても、老人クラブの友愛活動の地域見守り活動の中での声掛けなどをお願いしたところである。このようなコロナ禍での対応として、それから今後ますます高齢化が進展する中での地域課題として、この度のテーマのような高齢者の問題、これは非常に重要な問題と考えている。なかなか答えのないテーマであろうかと思うが、皆さまからの忌憚のない御意見をいただければと思う。

高橋委員

老人クラブは高齢者の団体であるので、色々思うところはあるわけであるが、感じているところをまず申し上げたい。老人クラブは地域コミュニティの１つであって、地域コミュニティといえば、社会福祉協議会を中心に、地域社会、各種団体が存在しており、我々老人クラブもその１つの地域コミュニティであるということであるが、高齢者の団体とはいいながら、高齢者を全部カバーできているわけではない。したがって、会員でない方は当然情報がこぼれるということ、自治会・町内会でも同様に、会員でない方には情報がこぼれてしまう現実がある。その割合がどんどん増えていることから、色々な各種の情報が末端までは行き届いてない、行き届きにくくなっているというのが現代社会の現象ではっきりとあると思う。そのような中、先ほど沖村高齢福祉部長の方からお話があったように、徹底ができていない部分が心配だとおっしゃったことも、もっともなことだろうなと思う。

その上で、現状、足りていないなというところを申し上げたい。まず１つは、先ほど御説明があった安佐北区で会議をされたように様々な事例が出てくる。いい傾向だと思うが、１つのテーマに対して、色々な検討・協議をし、問題があったことに対してその地域で共有する姿が出てくるわけであるが、このようなものが本当に地域社会、広島市の各地域コミュニティにこの情報がきちんと届くかというと、現在の仕組み、システムではとてもじゃないがなかなか届かないということがまず１つある。したがって、様々な事例がこれからも各所出てくると思うが、こういった事例の周知徹底を様々なところにしていくことや好影響を反映していく仕組みを、もっと深化していただきたい。その地域だけで共有できたが、他の地域では全く知らないという現象が圧倒的多数ではないかと思う。良き事例を、自らの住む地域でもそのようなことあるかもしれないことから、しっかり地域コミュニティが共有できるように持っていかないと、せっかくの良い事例が限定的なもので終わってしまうと強く感じている。そのため、様々な事例を各種地域コミュニティに共有できる仕組みを作っていくということが大事ではないか。

地域包括支援センターには本当に感謝している。高齢者は増える一方であるから、これからまだまだお忙しくなるだろうし、お世話になる対象者が増えてくると思う。先ほどお話があったように、介護をしっかり受けている対象者であるとか、民生委員がしっかりケアしている対象の方はまだいいと思うが、そこまでになっていない方、予備軍がいっぱいいるはずである。この方たちがどの程度、介護、ケアについての認識、認知ができているかというと、私はとてもじゃないが、まだまだ分からない。自分がその立場になってみないとほとんどのことは分からない。そして一番言えることは、高齢者世代は残念ながらアナログ世代であり、パソコンで開いて見てみなさい、スマホをしっかり見てみなさい、と言われても、圧倒的に、割合的にでき

ない世代が多い。したがって、ほとんどの方が、書いてあるものとか、端的に見て分かるようなデータが手元にないと認知、認識ができないということが現実じゃないかと思う。パソコンや新しいツールで情報を開示していると言っても、実質的に当事者には、その情報が届かない。スマホの扱い方１つが十分にできない方もたくさんいる。このところを含めて、本当に大事な情報として、例えば詐欺の問題、私の住んでいる地区でも数人やられたという情報が伝わっている。自分は大丈夫、引っかかりはしないと、ほとんどの方がそう思って引っかかっているわけである。例えば、自分の家で、変な言い方であるが、家庭内掲示板のようなところに書いた情報が貼ってあって、今日は運動をこのようにするとか、いきいき百歳体操をするとか、きちんと生活ができるような仕組みも１つの案である。今、言ったように情報を末端まで確実に皆さんがやっていく、守っていく、それが自分の健康につながる、ということをきちんと家の中で把握できるような仕組みを構築していただけるといいのではないかと感じている。

先ほど居場所づくりの話もあったが、認知症カフェが少しずつ増えている。私の地元の数人と行ってみたが、ほとんどの人が行ったことがないというのが現実であると思う。老人クラブの会長である私が初めて数名と行ってみた、試しに覗いてみたということであるから、高齢者のほとんどの人が知らない、行ったことない方が多い。そのため、どんどん地域包括支援センターと一緒にそのような場を体験してもらう人を増やす。認知症ではないが、皆、予備軍であるから、そのような機会を増やすという色々なやり方があるのではないかと思う。

永野会長

その他、民生委員の立場から小松委員に発言をいただきたい。

小松委員

民生委員と地域包括支援センターとの関係は、民生委員の活動には欠かせないような間柄になっており、日々、民生委員の会議などにも、地域包括支援センターの方に出席していただいて、情報共有を行いながら活動を進めているところであるが、昨今コロナの状況で、なかなか担当の地区の情報が得られないというような問題がある。訪問はできるだけしないようにという指示もあり、今はその点が一番難しい。地域の町内会長、老人会の方など、会えば話はするが、会合を開ける状態ではないので、難しいところではある。高齢者の方は日頃からとにかく人に迷惑をかけたくないというような方が多く、調子はどうか尋ねても本音のところを引き出せないというところもある。今はコロナの状況でますますひどくなっているのではないかというところがある。今の民生委員の活動としての問題点は、民生委員もなかなか地域の情報が入りにくいようなマンションの問題もあり、難しくなってきているというところがある。

永野会長

次に、学識経験者の立場から中谷委員に発言をいただきたい。

中谷委員

髙村地域包括ケア推進課長から御説明のあった資料７の【意見交換のテーマ】の３項目で重要なことをまとめていると思う。今、御意見を聞かせていただいて、確かにこういう埋もれていらっしゃる方をどうやって発掘していくかということで、窓口が非常に重要ではないか。窓口と高齢者の方はネットワークがそれほど強くないという御発言もあったので、やっぱりテレビを見ているのではないかという気持ちはある。家の中でテレビは御覧になっているとすれば、ケーブルテレビをもっと地元の強いネットワークとして使っていき、相談窓口がどこにあるということを流すようにしたり、いきいき百歳体操でケーブルテレビを使っているということであったので、そこでもう少しＰＲをして、困っている人があれば、体力が落ちたと思われる人があれば、かかりつけの先生とか、地域包括支援センターとか、市役所とか行かれてはどうかというネットワークを作られてはどうかと思った。それと、私は、地域包括支援センター発表会のアドバイザーとして

参加したときに思ったところであるが、社会福祉協議会が非常にネットワークを持っているし、地域包括支援センターは高齢者を対象者にしているが、引きこもり世代、若い方の引きこもり世代、障害を持った方とか、子育てのお母さんとか、そういう方々が関わっていけるのが、社会福祉協議会かと思った。そこのネットワークのつながりをもっていくのも重要なのかなと思った。

ネットワークという言葉の関連で、先ほど議事⑷の説明で気になったのが、資料５の４の包括的・継続的ケアマネジメント体制の構築のところで、「ネットワークの構築」という言葉を外しているようである。見落としている可能性もあるが、これ以外のどこを見てもネットワークの構築ができるという文言がなくなってしまったのではないかと思う。ネットワークの構築は連携とは違うので、「ネットワークの構築」を入れていた方が良いのかなと思った。

もう１点、意見交換のテーマを伺って思ったのが、資料５の最初のページの【事業実施及び計画の見直し】に、「可視化の視点を加える」と入れていると思う。どこの可視化なのか分かりにくくて、先ほどの御意見の中で、高齢者の方には、何をしているのかが分かりにくいのではないかという意見があり、誰に見えるための可視化なのか。地域包括支援センターの方にも、ここでいう可視化というのは、計画の評価の数字の見える可視化なのか、あるいは活動の可視化なのか、ということが少し分かりにくいように思う。もし活動の可視化であれば広報の中に活動を見えるようにしているかとか、数字を出した評価目標を出しているかということであるが、住民の方にこのような数字の目標を出しても分かりにくいかなという印象を持った。２点だけ追加として発言させていただいた。

高村地域包括ケア推進課長

１点目のネットワークの構築については、確かにネットワークの構築の文言を落としたので、また検討したいと思うが、今回、環境整備というもう少し大きな概念でネットワークの構築ということもひっくるめて捉えたということである。今までの評価基準が、ネットワークの構築の程度について、少しあいまいな表現であったことから、最終的には最も評価の高いところのみに、環境整備ができているかどうかと評価の尺度としているものである。今の委員の御指摘を踏まえ、また相談させていただきたい。

２点目の可視化ということであるが、住民の方々へというよりは仕事をしていく上で、まずは現状を把握するための地域診断ということに軸足を置いて可視化するという意味で、今回、評価の基準を書いたということである。もしかしたら別の部分で住民の方への周知の分野で、そのようなことも今後、文言を充実させていかないといけないところもあるのかもしれないが、今回の改正でいえば、分析に当たってということで可視化という言葉を使わせていただいた。

永野会長

私は地域包括支援センター活動発表会の資料をくまなく読んだ。これを読んで、今、中谷委員がおっしゃったネットワークが非常に大切だなという気はしている。やはり思いが違う。地域包括支援センターの方が非常に熱い思いをもって、地域に働きかけているだろうが、なかなかそれが全体のところまではいってない。やはり熱い思いというのが伝わる方法をぜひ考えてもらえればと思う。私はよく言っているのだが、デジタル時代にアナログなものを読むと結構響く。地域包括支援センター活動発表会にしても、聞きに行ったら面白かっただろうなということもあった。読んだら、熱い思いを持っているという感じはよく分かる。ぜひ、こういうことを絶やさないように頑張っていただきたい。

先ほどの中谷委員の「ネットワークの構築」に関する評価基準については、委員の意見を踏まえた修正を行う。

永野会長

以上をもって、本日の広島市地域包括支援センター運営協議会を終了する。